

11月 23日 (日) 創世記 24章	「僕がまだ祈り終わらないうちに、見よ、リベカが水がめを肩に載せてやって来た。彼女はアブラハムの兄弟ナホルとその妻ミルカの息子ベトエルの娘で…」(15節)。主を心から信頼し、主の言葉に従い続けたアブラハムに、主もあらゆる祝福を与えられた。そのアブラハムが信頼しすべてを任せる僕もまた、主を心から信頼し、その祝福に共に与る恵みをいただく。
24日 (月) 創世記 25章	「ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えた。エサウは飲み食いしたあげく立ち、去って行った。こうしてエサウは、長子の権利を軽んじた」(34節)。「長子」＝「初子」はイスラエルにとって、特別に価値あるものとされていた。しかしエサウはその大切な権利を、一時の欲望に負けて手放してしまった。わたしたちも大切なものを手放してはいないだろうか。
25日 (火) 創世記 26章	「その土地の人たちがイサクの妻のことを尋ねたとき、彼は、自分の妻だということを恐れて、「わたしの妹です」と答えた。リベカが美しかったので、土地の者たちがリベカのゆえに自分を殺すのではないかと思ったからである」(7節)。主が「わたしの誓いを成就する。」と語ってくださっても、主への畏れではなく、目の前の人を恐れて、父祖の罪を繰り返してしまう。
26日 (水) 創世記 27章	「エサウはこの父の言葉を聞くと、悲痛な叫びをあげて激しく泣き、父に向かって言った。『わたしのお父さん。わたしも、このわたしも祝福してください』」(34節)。長子の権利を軽んじたエサウだが、年を経て、父から受ける祝福の意味、その大切さを知る者と成長したのだろう。主の示してくださる導きを知ることのできるよう、日々、成長し続ける者であり続けたい。

大井バプテスト教会

メール配信登録メール senforn.obc@gmail.com

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

27日 (木) 創世記 28章	「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」(15節)。計略によって奪った祝福、それも主の計らい、主のみ心なのだろうか。主は自ら誓われた約束を必ず守り、決して見捨てないと、慈しみと憐れみをもって語ってください。
28日 (金) 創世記 29章	「こうして、ヤコブはラケルをめとった。ヤコブはレアよりもラケルを愛した。そして、更にもう七年ラバンのもとで働いた」(30節)。イエスが弟子たちに命じられたように「互いに愛し合」うことがどれほど難しいことか。母が兄よりも弟を愛し、夫は二人の妻の一方を愛する。創世記の物語は、人間の欠けや弱さをわたしたちに示し続け、自らを省みるように促す。
29日 (土) 創世記 30章	「ラケルは、ヤコブとの間に子供ができないことが分かった、姉をねたむようになり、ヤコブに向かって、『…わたしは死にます』と言った」(1節)。聖書、なかでも創世記は「人」を描く物語であることを、思われる。神にかたどり、神の似姿として造られた人は、神には決して及ばない者、神の憐れみによってのみ生きられる者であることを知らせる物語。
30日 (日) 創世記 31章	「神は、わたしの労苦と悩みを目に留められ、昨夜、あなたを諭されたのです」(42節)。ラバンに何度もだまされた忍従の二十年間を通して、ヤコブは兄エサウをだました自分の過去と向かい合い、主なる神の慈しみを改めて学んだのだった。そして今、主なる神の伴いを確信して故郷に帰るヤコブ。しかし、いよいよここから彼の信仰の闘いの本編が始まっていく。